

蟹と蝦との命を贖ひ生を放ちて現報を得る縁 第八

置^一染^二臣^三鯛^四女は、奈良京の富尼寺の上座の尼法邇^五の女なり。道の心純熟^六りて、初^七姪^八を犯さず。常に懇^九に菜^十を採り、一日^{十一}闕^{十二}けず奉^{十三}供^{十四}りて行基大徳^{十五}に侍る。山に入り菜を採り、大蛇の大蝦^{十六}を飲むを見る。大蛇に逃^{十七}へて曰^{十八}はく「是の蝦を我れに免^{十九}せ」といふ。免^{二十}さずしてなほ飲む。また逃^{二十一}へて曰^{二十二}はく「我れ汝が妻と作らむ。故に幸はくは吾れに免^{二十三}せ」といふ。大蛇聞き、高く頭頸^{二十四}を擡^{二十五}げて女の面^{二十六}を瞻^{二十七}り、蝦を吐^{二十八}きて放^{二十九}つ。女蛇に期^{三十}りて曰^{三十一}はく「今日より七日を経て来れ」といふ。然^{三十二}うして期^{三十三}れる日に到^{三十四}りて、屋を閉^{三十五}ち穴を塞^{三十六}ぎて身を堅^{三十七}め内に居る。誠に期^{三十八}れる如く来^{三十九}りて尾を以^{四十}ちて壁を拍^{四十一}つ。女恐^{四十二}り、明日に大徳に白^{四十三}す。大徳生馬山寺^{四十四}に住^{四十五}みたまひて、告^{四十六}げて言^{四十七}はく「汝免^{四十八}さるること得^{四十九}す。ただし堅く戒を受けよ」とのたまふ。すなはち三^{五十}帰^{五十一}五^{五十二}戒^{五十三}を受^{五十四}持^{五十五}たしめたまふ。然^{五十六}うして還^{五十七}来^{五十八}る道に、知らぬ老人大蟹^{五十九}を以^{六十}ちて逢^{六十一}ふ。問^{六十二}ひてはく「詎^{六十三}の老^{六十四}ぞ。乞^{六十五}はくは蟹を吾れに免^{六十六}せ」といふ。老答^{六十七}へてはく「我れは攝津国^{六十八}曳原郡^{六十九}の人、尽問^{七十}還^{七十一}麻呂^{七十二}なり。年七十八にして子息無^{七十三}し。命を活^{七十四}くるに便^{七十五}無^{七十六}し。難波^{七十七}に往^{七十八}きて

偶^一に此の蟹を得^二たり。ただし期^三れる人有^四り。故に汝に免^五さす」といふ。女衣^六を脱^七きて贖^八ふ。なほ免^九可^十さず。また蟹を脱^{十一}きて贖^{十二}ふ。老^{十三}すなはち免^{十四}す。然^{十五}うして蟹を持ちて更^{十六}返^{十七}り、大徳を餽^{十八}請^{十九}へて呪願^{二十}せしめて放^{二十一}つ。大徳歎^{二十二}めて言^{二十三}はく「貴^{二十四}きかな。善^{二十五}きかな」とのたまふ。彼の八^{二十六}日の夜にまた其の蛇来^{二十七}る。屋の頂^{二十八}に登^{二十九}りて草を抜^{三十}きて入^{三十一}る。女悚^{三十二}慄^{三十三}る。ただ床の前に跳^{三十四}ち爆^{三十五}く音有^{三十六}り。明日に見^{三十七}れば、一の大蟹有^{三十八}りて彼の大蛇を条^{三十九}然^{四十}に段^{四十一}切る。すなはち知^{四十二}る、贖^{四十三}ひ放^{四十四}てる蟹の恩^{四十五}を報^{四十六}ゆることを。并^{四十七}に戒を受けたる力^{四十八}なることを。虚^{四十九}実^{五十}を知らむと欲^{五十一}ひて耆老^{五十二}を問^{五十三}へば、姓名^{五十四}遂^{五十五}に無^{五十六}し。定^{五十七}めて委^{五十八}る、言^{五十九}は是^{六十}れ聖^{六十一}の化^{六十二}なることを。斯^{六十三}れ奇^{六十四}異^{六十五}しき事^{六十六}なり。

己れ寺を作り其の寺の物を用て牛と作り役はる縁 第九

大伴赤麻呂^一は、武蔵国多磨郡^二の大領^三なり。天平勝宝元年^四己丑^五の冬十二月^六の十九日^七に死^八ぬ。二年^九庚寅^十の夏五月^{十一}の七日^{十二}に黒斑^{十三}なる瘤^{十四}生^{十五}る。自^{十六}づから碑文^{十七}を負^{十八}ふ。斑^{十九}の文^{二十}を採^{二十一}るに、謂^{二十二}はく「赤麻呂^{二十三}は、己^{二十四}れが造^{二十五}る所の寺を

第八縁 善業についての現報説話。三空經・法十三に引用。

一未詳。本説話以外に所伝をみな。行基の登場する説話で、女が重要な役柄をはたしているものは、本説話以外に中巻三縁、十二縁、二十九縁、三十縁。二隆福尼院。行基の四十九院のひとつとして、大和国桑田郡登美郷(奈良市)に天平三年(七三二)に建立。三綱(上座、寺主、都維那)のひとつ。寺を統括する職。四未詳。本説話以外に所伝をみな。鯛女は、在俗の時に生れた娘であらう。五行基の粥食に供されるのであらう。六男子の在家信者が著生と交わることは邪淫とされた(優婆塞戒經・業品)。女子の在家信者の娘はいも同様であらう。不邪淫戒を犯すかのごとき約束である。このような約束によつて蝦を救ひ蝦は報恩して女を救う、というのが昔話の型。「戒を犯すような約束をして」蝦を救つても問題は何も解決しない、ということが本説話の展開によつて示される。蝦が報恩しないことに注目すべきであらう。マ生馬院。生馬仙房とも。行基の四十九院のひとつとして慶雲四年(七三三)までに建立。奈良県生駒市の竹林寺の地に所在したか。ヘ上文の不邪淫戒を犯すかのごとき約束をした罪が許されるための方法。改めて放生と報恩の説話が語られることされなければならない。ハ仏、法、僧に帰依し、在家信者の守るべき五戒(不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒)を受ける。誓約の儀式をおこなつて受ける。コ兵庫県屋島市、神戸市あたりに建立。嵯原郡宇治には行基の四十九院の船慧院、同尼院が天平二年(七三〇)に建立されている。ニ底本「尽問還麻呂」。「尽問」は、問を音仮名と解してつくものと訓む。意は未詳。あるいは「つくも髪」(伊勢物語・六十三にみえる)の略で老人をあらわすか。「還麻呂(名を還)」は、「還問」の熟語を念頭に置いて「還」を補つて「かにまろ」とする。老蟹を想起させる名と解する。三蟹を与えることを約束した人がいる。四施主(本説話のはいは鯛女)に仏の利益が到来するように祈願すること。傳勸請呪願放生と述べられる例は、中巻十二縁、十六縁。「以傳令呪願ス、水に放也(宣寺縁事抄・十三所引放生会縁起)」。五とびはねる。米忌院本訓「アツチハタラク(ハタメク)カ」。六受戒の功德であることが強調される。蟹報恩説話であるとともに、不殺生戒を守り放生したために利益を得た説話であることが、示される。六その姓名の人は存在しなかった。

第九縁 今昔物語集・二十ノ二十一に書載。

二未詳。本説話以外に所伝をみな。中巻三縁にみえる大伴の一族か。二東京都。二七四九年。二七五〇年。主人公の死より牛への転生までの期間は、中国説話においては、当日(広記・四三四・河内権守)・半年(広記・一三四・童安丹)・二年(法苑珠林・傳負輪・慈心縁・路伯達)と多様である。三寺物や寺の銭を借用して返さずに死に、体に斑文を有する中に転生した例は、広記・一三四所引異録竹木通、同・一三四所引佛戒錄・傳書言、同・四三四所引宣室志・河内権守、など。寺に關係しない負債の例は、法苑珠林・傳負輪・慈心縁・路伯達、程華、広記・四三四所引原化記・戴文、同・一三四所引報恩縁・童安丹、同・一三四所引王常同話・劉編題、同・一三四所引神祕錄・施注、など。いずれも斑文には前世の名があらわれている。本説話のような長文の例はみえない。

擅にして、恣なる心に随ひて寺の物を借用て報い納めずして死亡ぬ。此の物を償はむが爲の故に牛の身を受くるなり」といふ。茲に諸の眷屬と同僚と、慚愧する心を発して、慚ること極り無くして、謂はく「罪を作ること恐るべし。あに報無かるべけむや。此の事季の葉の楷模に録すべし」といふ。故に同じき年の六月の一日に諸人に伝ふ。冀はくは、慚愧無き者斯の録を覽て心を改め善を行ひ、むしろ飢の苦に迫められ銅の湯を飲むとも、寺の物を食まされ。古人の諺に曰はく「現在の甘露は、未来の鉄丸なり」といふは、其れ斯れを謂ふなり。誠に知る、因果無きにあらず、怖り慎まざらむや、と。所以に大集經に云はく「僧の物を盗むときは、罪五逆に過ぐ」とのたまふ。

常に鳥の卵を煮て食ひて現に悪しき死の報を得る縁

第十

和泉国和泉郡下痛間村に、一の中男有り。姓名詳ならず。天年邪見にして因果を信はず。常に鳥の卵を求め、煮て食ふことを業とす。天平勝宝六年甲午の春三月に、知らぬ兵士来りて中男に告げて言はく「国司召すなり」

といふ。兵士の腰を見れば四尺の札を負ふ。すなはち副ひて共に往き、^{一〇}織郡の内に山直里に至れば、表畠に押入らる。畠一町余に差二尺ばかり生ふ。眼には燭火を見、足を踐むこと問無く、畠の内を走廻りて叫び哭きて曰はく「熱きかな。熱きかな」といふ。時に当村の人有り。山に入りて薪を拾ふ。走り廻りて哭き叫ぶ人を見て山より下り来り、執りて引く。拒みて引かれず、なほ強ひて追ひ捉へ、すなはち籬の外より牽きて出す。地に踞れて臥し、嘿然して曰はず。良久にありて蘇り起き、然うして病み叫びて言はく「痛、足」といふ。山人問ひて言はく「何故を然らする」といふ。答へて曰はく「一の兵士有り。我れを召して将て来りて燭火に押入る。足を焼くこと煮るが如し。四方を見れば、みな火の山に衝まれ、出づる所の間無し。故に叫び走り廻る」といふ。山人聞きて袴を褰げ膊を見れば、膊の肉爛銷り、其の骨環在る。ただ一日を還て死ぬ。誠に知る、地獄は現に在り因果を信ふべし、鳥の如くあるべからず、鳥は己が兒を慈ひて他兒を食ふ、慈悲無き者は人なりといふとも鳥の如し、と。涅槃經に云はく「また人と獸との尊と卑との差別ありといふとも、命を宝び死を重ることは一俱に異なること無し」とのたまふ。善惡因果經に云はく「今の身に鶏の子を焼煮は、死にて灰河地獄に墮ちむ」とのたまふは、其れ斯

一のつとるべき型。模範。通説では「かたき」は型木の意。『さ』が木の意であるかいか、再考の余地がある。二本説話には日時が詳細に記述されている。すでに文書となつていたので詳細な日時が記載されていなかったのであろう。原文「故に二年六月一日」曰「平諸人」云々。上巻三十縁の頭録流布也」と同様、文書にされてひろめられたのであろう。日本霊異録には「録頭靈驗之簿」とみえる。寺には、仏や寺の刻驗、功德の出来事を記録し告知する紙や札板がはられ、たり懸けられていたか(辻英子)。二本説話。上文にみえる六月一日の文書ではない。上巻三十縁は經の文として同文を引用。本説話と上巻三十縁とに因果応報の実例を記した文書が發見する、といふ共通の性格より推測すれば、この文は、それらの文書に記される定期句であつたろう。上巻三十縁。三諸縁要集・思慎部・眞過縁所引の大集經・濟龍品のことき本文(大方等大集經・日藏分・三摩濟龍品の本文とは異なる)の取意。本説話の引用文と同文のものが、梵網經古迹記・下本に「大集」として引用。

第十縁 惡業についての現報説話。今昔物語集・二十ノ二十に書承。

大阪府泉大津市。セ戸令によれば十七歳以上二十歳以下の男。へ七五四四年。木簡(東野治之)。四尺の長さは異様だが、後代の絵圖や彫刻において冥官が長尺の本簡を持った姿に表現されていることが、東野治之によつて指摘されている。冥界からの使者が文書を所持していた例に、金剛般若經・維摩經・延壽論所引金剛般若經・靈驗記・纂要文策・文懷、伝記・一二四所引報應錄・王簡見・符應、同・三八一所引伝異記・裴齡・傳・薛・薛・帖、がある。二郡内に

到着して山直里に到着するとすく、表畠に押し入れられた。「織」は、「一」と同時に、の意。原文「纏至郡内於山直里」。まず本地域について記述し、その一部分である小地域について細述する。後代の和文に「一」に「一」として「一」を重ねた表現がみえるが、その源流に位置する表現と考えて、ここでは「一」に「一」と訓読する。二一岸和田市。二原文眼見燭火二は、効果的な説話展開という観点からいへば、この箇所には不要。三卵を食した者が冥界で焼き苦しめられる例に、罪業伝説教化地獄縁、法苑珠林・十惡篇・殺生部・惡心縁所引報應錄・齊・士望、伝記・二三三所引玉泉子・陳季貞、があり、冥界ではなくこの世で焼き苦しめられる例に、冥報記下・廣州小兒、がある。本来は冥界での刑罰として伝承されたものであろう。本説話には冥界とのむすびつきが明示されないが、下文には「地獄現在、応信因果」とみえる。四あ、足。本説話は村名の起原説話の性格をも有したか。三三中男の眼に映じた事実が述べられる。二鳥卵が受けたのと同じ苦を、中男は受ける。ここでは「焼」と「煮」とが区別されている。「煮」は名義抄では、「ニル、イル、ヤク、などの訓があり、調理用語といふべきであらう。「焼」は調理用語とはいへない。二中男を食した者が焼き苦しめられる、という刑罰は「地獄」で受ける罰である。冥界で受ける罰である、という前提での記述。上文の「天年邪見、不信因果」と合わせて考えれば、本来ならば死後に地獄で受苦するはずが当人が因果を信じなかつたために受苦の時期を早めて現在世で受苦した、という説話として本説話が解されていたと考えられる。冥界での受苦ではなくこの世での受苦として述べられている冥報記下・廣州小兒

以尾拍壁、女恐明日白於大德、大德住生馬山寺、而告之言、汝不得免、唯堅受戒、乃令受持三帰五戒、然還來道、不知老人、以大蟹而逢、問之詎老、乞蟹免吾、老答、我振津国鬼原郡人、尽問遐邇麻呂、年七十八、而無子息、活命無便、往於難波、偶得此蟹、但有期人、故汝不免、女脱衣贖、猶不免可、得脱墓贖、老乃免之、然蟹持更返、勸請大德、呪願而放、大德數言、貴哉善哉、彼八日之夜、又其蛇來、登於屋頂、拔草而入、女悚慄焉、唯床前有跳爆之音、明日見之、有一大蟹、而彼大蛇、条然段切、乃知、贖放解報恩矣、并受戒之力也、欲知虛實、問于耆老、姓名遂無、定委、耆是聖化也、斯奇異之事也、

己作寺用其寺物作牛役緣第九

大伴赤麻呂者、武藏国多磨郡大領也、以天平勝宝元年己丑冬十二月十九日死、以二年庚寅夏五月七日、生黑斑贖、自負碑文矣、探之斑文、謂、赤麻呂者、壇於己所造寺、而隨恣心、借用寺物、未報納之、而死亡焉、為贖此物故、受牛身者也、於茲諸眷屬及同僚、発慚愧心、而慄無極、謂、作罪可恐、豈心無報矣、此事可録、季葉楷模、故以同年六月一日、伝乎諸人矣、冀無慚愧者、覽乎斯録、改心行善、寧飢苦所迫、雖飲銅湯、而不食寺物、古人諺曰、現在甘露、未來鉄丸者、其斯謂之矣、誠知、非無因果、不怖慎歟、所以大集經云、盜僧物者、罪過五逆云々、

3 堅(采)一堅

4 令(采)一全

5 詎(采)一誰

6 遐(采)一ナシ

7 呂(采)一石

8 便(采)一使

9 復(采)一後

10 脱(采)一境

11 爆(采)一爆

12 老(采)一宛

1 而(采国)一ナシ

2 録(采)一報

3 葉(采)一業

4 寧(采国)一寛

5 飲(采)一飲

6 謔(采国)一説

7 歟(采国)一歟

常鳥卵煮食以現得惡死報緣第十

和泉国和泉郡下痛脚村、有一中男、姓名未詳也、天年邪見、不信因果、常求鳥卵、煮食為業、天平勝宝六年甲午春三月、不知兵士、來告中男言、国司召也、見兵士腰、負四尺札、即副共往、纔至郡内於山直里、押入麦畠、々々一町余、麦生二尺許、眼見燭火、踐足無間、走廻畠内、而叫哭曰、熱哉々々、時有当村人、入山拾薪、見於走廻哭叫之人、自山下来、執之而引、拒不知所引、猶強追捉、乃從離之外、牽之而出、隣地而臥、嘿然不語、良久蘇起、然病叫言、痛足矣云々、山人問言、何故然也、答曰、有一兵士、召我將來、押入燭火、燒足如煮、見四方者、皆衝火山、無間所出、故叫走廻、山人聞之、囊袴見膊、々肉爛銷、其骨稟在、唯逕之一日而死也、誠知、地獄現在、応信因果、不可如鳥、鳥慈已見、而食他兒、無慈悲者、雖人如鳥矣、涅槃經云、雖復人獸尊卑差別、宝命重死、二俱無異云々、善惡因果經云、今身燒煮鷄子、死墮灰河地獄者、其斯謂之矣、

1 天(采国)一其

2 札(采)一於

3 牽(采国)一事

4 囊(采国)一塞

5 唯(采国)一准

6 復(采)一得

7 獸(采国)一教

8 其斯謂(采国)一其斯謂、來斯謂

罵僧与邪姪得惡病而死緣第十一

聖武天皇御世、紀伊国伊刀郡奈原之狹屋寺、尼等發願、於彼寺備法事、請奈良右京藥師寺僧惠惠師、字曰依綱、俗姓依綱、故以為字、奉仕十一面觀音、悔過、時彼里有

1 刀(采)一力

2 綱(采)一垢